

萩にあしあと残そうよ

「特別発行 野口雨情と萩小唄」

令和2年(2020)
4月20日発行
—第6号—
発行：大塚好一



野口雨情生誕 120 周年の
平成 14 年 (2002) 5 月建立

「思いがけない発見」

三月の半ば、自転車に乗る私の目に留まったのは、かの野口雨情の詩碑でした。何度か通り過ぎていた場所での思いがけない発見に、強い興味を持たないはずがありません。新型コロナウイルスの感染拡大予防のため、一時休館していた市立図書館が四月に入り再開したので、鼻息も荒く足を運びました。

ところが、雨情の童謡に関する図書はあるものの、「萩小唄」の手がかりになりそうなものはありません。そこで、

郷土資料のコーナーにないものかと思い、受付カウンターの方に協力を求めました。しかし結果は同じでした。

結局、解説板に記載された参考文献『定本野口雨情』第五卷（未来社）と『野口雨情詩と民謡の旅』東道人著（踏靑社）の二冊が、山口県立図書館にあるということとなり、取り寄せてもらうこととなり、到着の連絡を待ちました。

「興味を持つ理由」

◆野口雨情について◆

野口雨情（本名英吉）は、明治一五年（一八八二）五月、現在の茨城県北茨城市に生まれ、昭和二〇年（一九四五）一月、疎開先の栃木県宇都宮市で生涯を閉じました。

「十五夜お月さん」「七つの子」「赤い靴」「船頭小唄」「波浮の港」など数々の有名作品を残し、北原白秋、西條八十

とともに「童謡三大詩人」と言われました。

やがて、地方への童謡・民謡普及のための講演旅行や詩作の旅が多くなるとともに、全国各地でたくさんのお新米民謡作品を発表しました。

◆野口雨情と私◆

雨情の生涯において、唯一師弟関係にあった人物（弟子）が、私の郷里塩原温泉で旅館を営んでいました。このため雨情はたびたび塩原を訪れ、足跡を残しています。

前職で「野口雨情と泉澤太郎」心かよわす二人の詩人」という企画展に携わったことで、雨情の孫の山登氏を訪ねたり、栃木県内の雨情の詩碑を巡ったり、墓参をすることも叶い、私にとって雨情は身近な存在となりました。



塩原ものの語り館で開催した
手作りにこだわった企画展

「雨情と山口県」

◆防長新聞の記事より◆

野口雨情けふ来山、県下を
行脚して新防長民謡を作詞

民謡詩人野口雨情氏は二日来山、数日間滞在した後、半月の予定で県下民謡行脚を行って防長民謡を作詞、帰京後、藤井清水氏の作曲でコロムビアに吹込み天下に宣伝することになった。

（昭和十年五月二日付）

野口雨情さん憧れの萩を訪
ひ、萩を謡って大津に発す

民謡作家野口雨情さんは、二日午後二時頃、憧れの地萩に來り、史跡勝地を尋ねて、四日大津郡地方に向ったが、萩に滞在中のものした『萩民謡』は次の通り、（以下略）

（昭和十年五月五日付）

秋吉小唄―野口雨情氏作歌

去る八日天下の奇勝秋芳洞を探勝した民謡詩人野口雨情氏は、次の通り、秋吉小唄を作った。（以下略）

（昭和十年五月一三日付）

※東道人著『野口雨情 詩と民謡の旅』より引用

◆民謡行脚の成果◆

雨情の来県を伝える防長新聞記事によれば、五月二日に山口市入りし、数日の滞在をした後に県内各地を巡る予定であることが読み取れます。

しかし、次の記事で「二日午後二時頃、憧れの地萩に來り」とあることから、雨情が「さっそく萩に行くでやんす」とばかりに出かけた様子が目に浮かびます。

雨情はこの山口民謡行脚において一三篇を作詞しました。「旅の風草」と題された詩作ノートの一冊目に訪問順に「萩」「湯本温泉」「仙崎」「秋吉」「防府三田尻」「上関」の六篇が、さらに二冊目に「柳井」「山口」「徳山」「岩国」「久賀」「玖珂」「高森」の七篇が収められています。

また別の時期に作られたものとして『定本野口雨情』第五卷に、「南蛮音頭」「宇部小唄」「室積小唄」の三篇が収録されています。

なお、紙上の表題は「萩民謡」となっていますが、「旅の風草」でも「萩小唄」とされており、もともと「萩小唄」として作られたようです。

「萩小唄」

野口雨情

波は渚に螢は草に
月は指月の蔭に入る

春は桜の川島堤
うすらおぼろの夜がつづく

萩の大橋流しちやならぬ
流しやたよりが遠くなる

萩の笠山明神池は
潮のみち引きままならぬ

松下村塾昔のままに
今も松風絶えやせぬ

匂ひゆかしく香もなつかしく
色も黄金の夏蜜柑

さすが長州は女でさへも
台場きついで国のため

同じ流れの阿武川さへも
末はわかれて海に入る

泣いて見かへり別れを惜む
涙松ではないけれど

砂は白砂松青々と
波も静かな菊の浜

①

指月とは、萩城の詰丸が築かれていた指月山（標高一四三m）のことです。萩城は、慶長九年（一六〇四）に毛利輝元が築城しました。

②

橋本川に沿う川島堤には、山形有朋や桂太郎らが寄贈した桜がルーツという約二kmの桜並木があります。吉田松陰の母に見てもらうために植えたと言われています。



散歩も楽しい桜の並木

③

松本大橋のことでしょうか。詩中の表現とはいえ、低湿地の多い三角州内の萩では、古くから氾濫が多かったそうです。ちなみに、昭和四九年（一九七四）に上流に阿武川ダムが完成しました。

④

明神池は、笠山と本土との間に砂州ができて陸続きになった際、埋め残されてできた池。溶岩塊の隙間を通して外海と繋がっているため、干満に応じて水位が変動します。



海水魚が泳ぐ明神池

⑤

吉田松陰を祀る松陰神社を参拝し、松下村塾を訪れることを、雨情も楽しみにしていたのではと、自身に重ねたくなります。



松陰神社境内にある松下村塾

⑥

夏みかんはかなりの高値で取引されていました。当時知名度はもちろん、経済的にも萩を支える黄金色の果実でした。

⑦

江戸末期、外国船からの襲撃に備え、日本海に面した菊ヶ浜に築かれた土塁。滅多に外に出ることのなかった武士の妻や奥女中までが築造に参加したことから女台場（おなごだいば）と呼ばれます。

⑧

上流で長門峡の景勝を作り出した阿武川が、松本川と橋本川とに分かれて日本海に注ぎます。萩の町はこの三角州内に形成されました。

⑨

萩から山口を通って三田尻（現防府）までの萩往還。萩を出発してから、城下が望める最後の地に松並木がありました。その「涙松」において旅人は萩に別れを告げたといえます。安政の大獄で江戸に護送される吉田松陰も歌を詠んでいます。

帰らじと思ひ定めし旅なれば
ひとしほぬる涙松かな



帰った時は嬉し涙

⑩

萩の代表的景観地である菊ヶ浜のことです。詩のとおり白砂青松の海岸で、指月山や沖の島々を望むことができます。

「詩碑を建てた人物」

雨情詩碑を建立した人物は、明神池の畔で「いそ萬」という料理店を営む末武芳和氏です。ご本人が雨情好きで、何うと嬉しそうに経緯などを話してくださいました。そして、後日情報交換しようという意気投合しました。山口県萩市という場所で、野口雨情が縁を紡いでくれたのです。



人気の磯定食